高等教育における
質保証のグローバル化

デュルク・ヴァンダム

OECD教育局教育研究革新センター (CERI)
所長

平成23年度大学評価フォーラム講演
– 2011年10月26日　於：東京 –

概要

1. 高等教育における質保証のグローバル化による成果

2. 新たに生まれつつあるリスク

3. グローバル化と質保証

4. 質保証のための戦略

1.
質保証のグローバル化による成果

高等教育における質保証のグローバル化の動向

- 今日ほとんどの高等教育制度において、十分に確立された質保証の取り決めが存在
  - 政府によるインプット操作からアウトプット志向の質保証へ
  - 高等教育機関の自律性と評価とのやりとり
  - 一層の透明性および社会に対するアカウンタビリティの要求
  - 大衆化、自由化、ならびに学力の低下およびアカデミック・コントロールの低下に対する不安
  - 費用対効果の要求の拡大

成果

- 内部および外部質保証はプログラム・レベルおよび機関レベルの教育の質にプラスの影響を与えている
  - 質保証は、ほとんどのプログラムが基本的に守らなければならない質レベルを満たすことを確保する上で重要な役割を果たし、基準に満たないものについては対応が取られてきた
  - 質保証は、研究にとっての最優先事項とバランスを保ちながら、高等教育の教育機能をうまく強化してきた
  - 戦略的な管理能力の一般的強化の一環として、質に関する教育機関のリーダーシップが強化されてきた

成果

- 必須の質水準は高等教育制度全体に浸透してきた
  - ほとんどの教育機関では、内部質保証手続きが確立している
  - ほとんどのプログラム/教育機関は、ピア・レビューに基づく正式な外部質保証の対象となっている
  - ほとんどの教員は、より強化された質保証体制を意識し、それに応じている
  - ほとんどの学生は、積極的に参加していないものの、質保証制度の存在を認識している

成果

- 質保証に対する共通のアプローチが発展し、制度化されてきた
  - いくつかの基本ルールおよび「グッド・プラクティス」に対する支持
  - 高等教育の質保証機関の国際的ネットワーク（INQAAHE）と地域的ネットワークの果たす重要な役割
  - 一方、極めて多くの国固有の特質が、質保証にかかる決定事項の自動的相互認証と、ひいては学位の自動的認証を危険に陥れている
  - 質保証機関のメタ評価および登録手続きにみられる新たな展開

2.

新たに生まれつつあるリスク

リスク

- 官僚化、形式主義、そして「法規則主義」
  - 質保証は、手続きや規則に「とらわれ」、様式に記入することや標準化された質問票の「該当欄に印をつける」ことが慣例となっている
  - 法規則主義的な手続きは、過度の形式主義につながり、評価者達がリスクを厭わない行動をとることを回避させてしまう
  - 形式化された質保証手続きは、しばしばピアがプログラムや教育機関の現状を「読みとる」ことの難しさを増大させる

リスク

- 世評競争において外見を取り繕う
  - 多くの手続きには、なお外見を取り繕う行為や表面的なコンプライアンスを行う余地が残っている
  - 教育機関は、スムーズなレビュー手続きを保証することが求められる「専門的な」質保証マネージャーに、次第に依存するようになっている
  - これからのレビューやアセスメントは、協同的学習プロセスに対処できるものではなくてはならない。

リスク

- アカウンタビリティと改善の両機能のバランスを図ることは非常に困難であることが証明されてきた
  - 厳格な外部アカウンタビリティの機能は、内部的な質改善の機能を危機に陥れ、学者を人目にさらし、学術コミュニティにおける質保証体制の正当性を脅かす
  - 改善および向上を強調し過ぎることは、評価プロセスの重要な強みを鈍らせてしまう

リスク

- 質保証に伴うコストおよび作業量は、実際のところ、かなり大きいかもしれない
  - コストは多くの国において問題となっているが、ほとんどの場合、直接的な金銭的コストは許容範囲にある
  - 質保証機関に対する国による資金提供は、教育機関からは、本来自分たちにとって正当な財源を転用されていると考えられることもある
  - 職員の時間およびその他の様々な「あいまいな」活動に費やされる目に見えない非金銭的なコストが非常に大きいと思われる

リスク

- ほとんどの質保証体制は、依然としてインプットおよびプロセス基準に過度に依存している
  - 供給サイドまたは実施の観点から定義づけられる質保証基準および手続き：学生に対して十分な質を持って提供されるものは何か？
  - 学習成果へ向かう傾向にはまだかなりためらいが見られる：OECD高等教育における学習成果の評価（AHELO）プロジェクトは、実際に達成した学習成果の経験的証拠によって質保証を発展させるものであり、一層の組織的かつ政治的な支持を必要としている

リスク

- ほとんどの質保証体制は最低基準を当てはめている
  - 質の説明を多様化する試みや基準以上のラベルに対して、支持や受容はほとんどない
  - 質保証が、よいプログラムに対して、卓越性へ向けた一層の向上や売り込みを行う刺激を与えることはほとんどない

リスク

- ピア・レビュー手法の限界
  - ピア・レビューは専門的な環境における同業者相互による評価の非常に強力な手法である
  - しかし、個人的な見解や学問領域の既存の議論に対して非常に影響を受けやすくもある
  - 世代的な側面：年齢の高い学者がより若手の学者/ライバルを評価するようになる
  - 学術の世界におけるネットワーク、友情または敵愾心、競争および対立などの影響から、場合によりピア（専門家）の独立性は問題となる
  - コストや言語の問題から国際的なピアを雇うことには限界がある

3.
グローバル化と質保証

高等教育制度

- 高等教育における主な傾向

  (OECD, 2008年高等教育政策レビュー (*Thematic review tertiary education, 2008*))

  – 継続的な拡大
  – 教育提供の多様化
  – 異なる背景を持つ学生の増加
  – 新しい資金獲得の取り決め
  – アカウンタビリティと実績に対する一層の重点化
  – 教育機関のガバナンスと管理の新しい形態
  – グローバルなネットワーク、流動性および協働

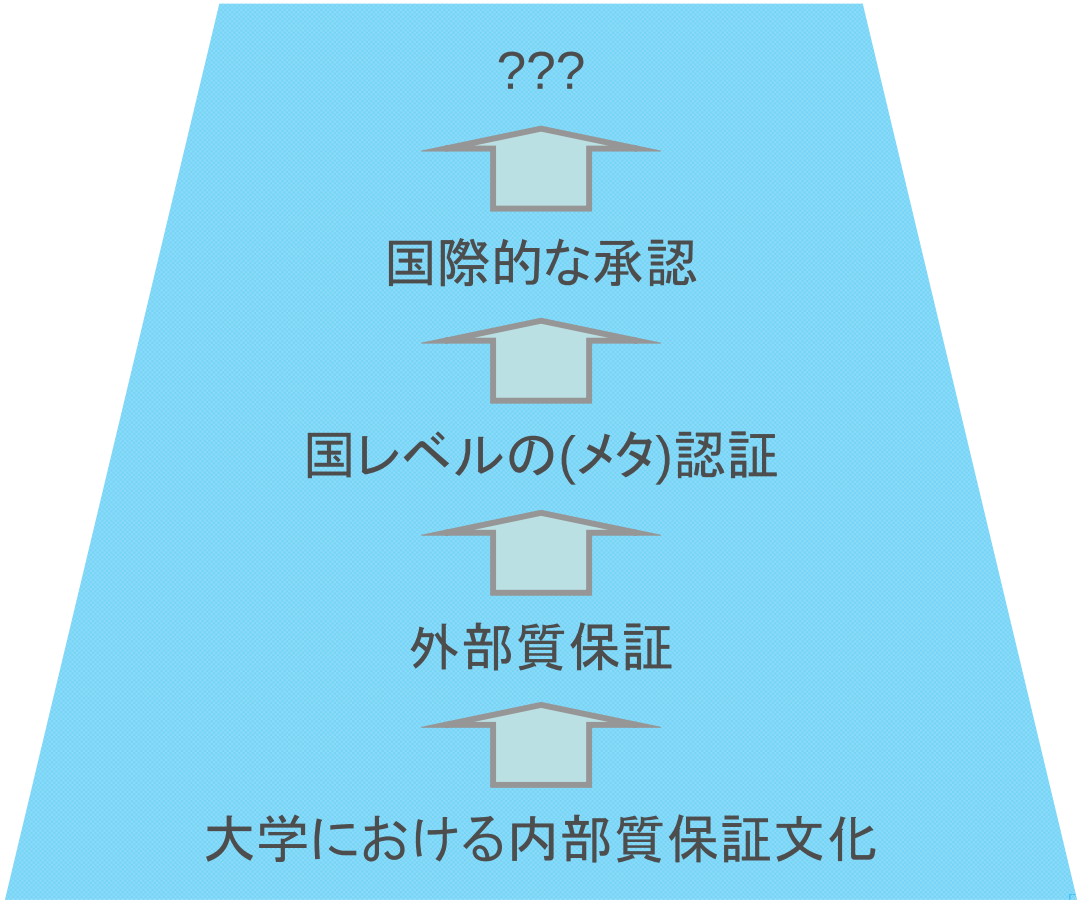
グローバル化

- 世界的規模の集中と統合
  - 学術研究における統合化されたグローバル・システム
  - 学生、研究者、教員および教育機関のリーダー達の流動性の拡大
    - 学者および研究者の新たに出現しつつある市場
  - 技術発展により推進される教育・学習の新しい提供方法の拡大
  - 国際化する労働市場
    - グローバル化する専門家組織
    - 高い技術を持つ労働力の移動の拡大

グローバル化

- グローバル化の課題とリスク
  - 高等教育機関の国際的な活動は国内の質保証の領域から「離脱」している
  - 商業的利益に動かされた質の悪い教育の提供や「ディプロマ・ミル」
  - 国外の教育機関から受け入れるまたは国外の教育機関へ送り出す場合の、単位互換の難しさ
- 国レベルの質保証制度を国際的な取り決めで補完する必要性

質保証の諸レベル



質保証における国際化の役割

- ネットワークや連合における協働、交流および専門的集団としての発展
  - 例：INQAAHE
- 共通のガイドラインおよび基準
  - 例：欧州基準、UNESCO-OECDガイドライン
- 単位互換、資格承認等を考慮した、質保証の成果および決定事項の相互認証
- 質保証機関の承認（メタ認証）
  - 例：欧州質保証機関登録簿

4.

質保証のための戦略

重要な条件

- 高等教育の質保証は、以下の条件で最もよく機能する
  - 公的政策に重点を置きながらも政府から少し距離を置いている
  - 改善に資することのできる方法を示すことにより、教育機関の自律性を支えている
  - 高等教育の透明性および信頼性を促進している
  - 学術界から学術的活動の一部として捉えられ基本的に信頼を得ている

戦略

1. 制度「革新」の推進力であること
2. 学界、教育機関、学生および社会にとって実際に「関連性」を持つものに重点を置くこと
3. 教育機関の「多様性」を前向きに認めること
4. 「地域」と「グローバル」とを結びつけること
5. 主要な資本である「信頼性」に投資すること

戦略 1. 革新

- 質保証は、しばらく高等教育における革新の最強の推進力であった
- 組織化、標準化および主流化する際に、保守化するリスクが拡大
- 質保証は、再度、制度における中心的な革新志向の勢力となることが望まれる
  - 革新的な実践のための質保証ツール
  - 革新者はピア・レビュー・パネルにふさわしい
  - 他の革新志向の勢力と結びつけ、ネットワークをつくる

戦略 2. 関連性

- 質保証が始まって20年を経過した今、質に関するすべての基準および指標を確認する必要性はもはやない。
- 本当に重要なことについて一層の重点を置くことが、バランスを取り戻す助けになる
  - アウトプットおよびアウトカム、より具体的には学習成果
  - 達成された質に関する実際の情報を提供することにより、世評志向の透明性ツールを補完、修正する

戦略 3. 多様性

- 学生および教育機関のプロフィールの多様性について実像と一致させることにより、標準化のリスクを避けることが非常に重要である
  - ツールおよび手法を批判的にチェックし、より柔軟かつ洗練されたものにする(「スマートな質保証」)
  - 「すべてに当てはまる」アプローチが、多様化する世界において助力とならないことを受け入れる
  - これは「脱標準化」プロセスを伴う可能性もある

戦略 4. 地域 & グローバル

- 高等教育における全体的なグローバル化に伴う質保証の国際的役割と機能の重要性の拡大について認識する
  - グッド・プラクティスを共有する、アウトカムを認め合う、合意された基準を発展させる
- しかし、学問の現場や地域事情における具体的なニーズにも寄り添う

戦略 5. 信頼

- 信頼は質保証制度およびコミュニティにおけるおそらく最も重要な資本である
  - 学術界および教育機関の信頼レベルの回復に一層の投資を行う
  - 「批判的な友人」であることの付加価値を証明する
  - 証拠に基づく真の開放性および透明性が学術的価値システムの核心であり、認知に基づく世評競争は持続的ではないことを説得する

ご清聴ありがとうございました

dirk.vandamme@oecd.org
www.oecd.org/edu/ceri